長期連載――変革構想の研究 第11回 アソシエーション（上）

社会革命としてのアソシエーション

請戸 耕市

ソ連崩壊後に〝再発見〟

「マルクス主義」の常識では、資本主義社会にかわる新社会は、「社会主義」「共産主義」だった。しかし実はマルクス自身においては社会主義・共産主義の語を使うのは稀で、むしろ、アソシエーションAssoziationだった。それは、マルクスの時代が、協同組合・労働組合・コミューンなどのアソシエーション運動の時代であり、同時代に広く使われていた語だからだ。ところが、20世紀に入ってアソシエーションという語は消えていく。

理由の一つは、19世紀末から20世紀にかけて、生産力の高度化と国家の強大化・公的社会的機能の拡大が進み、アソシエーション運動が周辺化を余儀なくされたからだ。

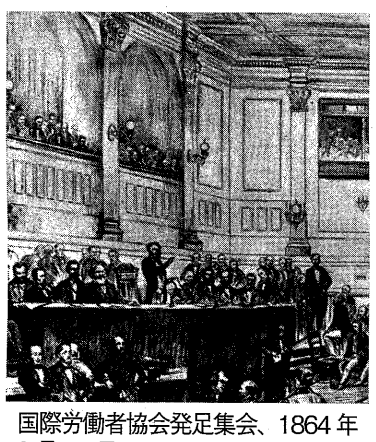
理由はそれだけではない。20世紀の運動展開、とりわけロシア革命が、国家集権的かつ急進的に展開された影響である。例えば大月版『マルクス・エンゲルス全集』ではAssoziationに20もの訳語がバラバラに当てられ、アソシエーションという概念は事実上、抹消されてきた。

21世紀に入って、アソシエーションが再び注目されている。

その理由の一つは、ソ連崩壊を契機にした論争の中で、マルクスの読み直しが提起され、再発見されたからだ。

今一つの理由は、資本主義の新自由主義化・グローバル化・金融化、戦争、災害、分断・対立、環境破壊、生活・生存の破壊などにたいする対抗運動が、アソシエーション運動の萌芽・再興として展開されているからだ。

つまり、〈社会主義・共産主義ではウケが悪い〉から言い換えているのではない。ソ連の総括と情勢の推転の中で、「マルクス主義」とは違うマルクスの変革理論が提起されているのである。



国際労働者協会発足集会、1864年9月28日

アソシエーションとは〈労働する諸個人が互いに主体的・能動的・意識的に結びついた協同組織〉。〈協同組合的社会〉とも。

アソシエイトした諸個人が、自ら生産を管理し、生産手段を所有し、協同労働に従事する社会的生産のシステム。同時に、多種多様な協同組織・地域組織・自治組織などが、重層的に分節しつつ縦横に連合する政治的社会的なシステム。しかもグローバルに交通し依存するシステム。

〈アソシエイトした〉（assoziiert 独 associated 英）とは、同一の目的のために、能動的・自覚的・自発的に、相互に繋がり、連携すること。

人間解放

根本には、マルクスの人間の存在把握と人間解放の原理がある（「第10回疎外論（下）」本紙259号掲載）。人間諸個人が自由を獲得し、自然と人間の統一、人間と人間の結合を自覚的に回復する社会。

生産関係

人類史において、生産関係の歴史的な発展段階は大きく3つ。

第一の段階は、本源的な共同体等を基礎にした共同体的生産関係。

第二は、共同体にかわって貨幣が人びとを結びつける商品生産関係。資本主義はその最も発展した形態。

そして資本主義の発展のうちに胚胎される新たな生産関係が第三のアソシエーション的生産関係。それは自由な諸個人が自発的・自覚的に形成する生産関係。

国家の再吸収

国家の階級支配を解体し、国家が社会から吸収していた公的社会的機能を、アソシエーションのもとに再吸収する。（この項次回）

商品生産と正反対

さらにアソシエーションの特徴を何点か。

（1）資本主義において、事実上、生産手段にたいする労働者の社会的占有が生み出されているが、それは少数者による資本主義的私的所有によって覆い隠されている。その潜在的な社会的占有を、資本主義的私的所有の廃棄によって顕在化させたのがアソシエーション。その存立の基礎は、アソシエイトした諸個人による共同的所有。所有の主体は社会や国ではない。

（2）アソシエーションでは、労働する諸個人は、生産手段にたいして、社会的にアソシエイトした自由な個人として関わる。労働は、共同の生産手段をもって、自分たちの労働力を意識的に社会的労働力として支出する過程であり、直接に社会的な労働である。

固定的な分業が消滅し、とりわけ肉体労働と精神労働との対立が消滅している。

生産過程は、人間の意識的計画的な制御のもとにおかれる。制御の主体はアソシエイトした諸個人。社会や国家ではない。

労働時間が大幅に短縮され、人間諸個人が個性と能力を全面的に発展させていく。

（3）人間と自然との間の物質代謝が、物象の無政府的な運動による支配をやめて、合理的に規制され共同で統制される。

（4）商品も貨幣もない。一切の階級もない。差別や分断もない。国家も死滅している。

資本主義の中に

アソシエーションは、資本の自己否定として、転倒した形態であるが、現に資本主義の中に潜在している。それは、資本が、〈疎外された労働〉の矛盾を基礎にし、〈私的生産としての社会的生産〉という矛盾した存在だからだ（「第10回疎外論（下）」）。資本は、資本の自己否定として〈社会的なもの〉を産出し、しかしまたそれを否定するという形で振動的に矛盾を拡大していく以外にない。

この把握は重要で、ここから潜在するアソシエーションを顕在化させる実践が社会革命となる。資本主義内の変革にとどまる改良主義との差異も、この把握の有無にある。資本の総体的な把握というマルクスの作業は、潜在するアソシエーションを、実践に先行して理論的につかみ出すものに他ならなかった。

◇　◇　◇

アソシエーションを概観した。「マルクス主義」の常識とも、ソ連の実態とも、一般にイメージされてきた社会主義とも違う。さらに次の2点を強調したい。

①個人か社会か

所有も計画も主体は諸個人だと強調した。マルクスの社会把握の視座は、労働する諸個人を基礎にしている。

「われわれが出発点としてとる前提は、現実的な諸個人、彼の行動、および彼らの物質的生産諸条件」「物質的に生産している諸個人」（『ドイデ』）

〈労働者〉〈労働者階級〉ではないのか。

あらゆる時代に人間社会を支えてきたのは〈労働する諸個人〉。資本主義では、労働する諸個人は〈賃労働者〉という姿をとっている。しかも様々な対立と分断の中にいる。それは労働する諸個人の疎外された姿。にもかかわらず、厳然としてその一人ひとりは多様な個性と能力をもった個人。その一人ひとりが現実の社会を日々再生産している。

労働者階級とは、そういう労働する諸個人の集団。

つまり、労働する諸個人の個別性・主体性・矛盾性が社会と歴史を発生させている。そういう人間の存在把握が、労働する諸個人という把握にはある（「第10回疎外論（下）」）。それを社会や階級といった全体の中に解消して理解してはならないのである。

マルクスとエンゲルス

労働する諸個人を基底に置いた社会把握という視座は、〈個人を社会の構成部分と見る〉視座と鋭い対照をなしている。この違いが、マルクスとエンゲルスとの理論的な差異を生んでいる。

例えば〈社会的所有〉を、エンゲルスは〈社会による所有〉、しかも〈国家による所有〉と理解している（『反デューリング論』）。つまり、社会を主体化し、個人をその構成部分と見なしている。この違いは、マルクスとエンゲルスが共同作業を始めた当初からの一貫した違いであった。そして、個人を社会の構成部分と見る視座によって「マルクス主義」が整理・解説され、スターリン主義の土台となった。

②社会革命

潜在しているアソシエーションを、顕在化させていく実践が社会革命である。

したがって、社会革命は、〈国家権力の転換を画する政治革命があって、しかる後に始まる〉のではない。資本主義とアソシエーションの新旧の政治・経済・社会・文化のシステム間で、長期にわたる競合・抗争・消長がたたかわれる。革命の総括軸は社会革命にある。社会革命の前進の中でその結節環として政治革命がある。

1848年革命段階でマルクスは、国家集権的で急進的な革命論を構想していた（『宣言』）。しかし、48年革命の教訓とイギリス労働運動の経験、『資本論』をはじめとする経済学批判の深化、アソシエーションの萌芽である国際労働者協会への参加、『共産党宣言』との対照をなす「国際労働者協会創立宣言」（1864年）などの指導文書の執筆を通して、48年段階の革命論からの転換が構想されて行く。それは転換というより、初期のマルクスがつかみ取った方法と原理（「第10回疎外論（下）」）の後期における徹底であり、もってする48年段階の革命論の止揚である。

行き詰まりと分解

ところが、エンゲルスは、48年段階の革命論の枠組みを超えることができなった。

たしかに、最晩年のエンゲルスは、「一陣地から一陣地へ徐々に前進」「1848年にたんなる奇襲によって社会改造に成功することがいかに不可能であったかを決定的に証明」（注1）と述懐している。これをとらえて、48年段階の国家集権的で急進的な革命論にたいするエンゲルスの自己批判と新たな方向の示唆とする見方があるが、違うだろう。

〈人間解放の原理〉〈資本の矛盾〉〈アソシエーションの潜在〉〈労働する諸個人〉といった核心問題において、マルクスとエンゲルスの差異は歴然。エンゲルスの述懐は、生産力の昂進と労働者の状態の前に革命の展望を見失い、急進主義から漸進主義に転回したという以上ではないだろう。

エンゲルスの転回と軌を一にして次のように路線的な対応が現われた。

ベルンシュタイン

〈マルクス主義は資本主義の現状に対応していない〉として修正・破棄を求める路線。

カウツキー　ベルンシュタインを批判し、エンゲルスの〈陣地戦〉を軸に、エンゲルスの整理・解説を墨守する路線。

レーニン　カウツキーを批判し、エンゲルスの整理・解説に依拠しつつ、国家集権的で急進的な革命論を強く継承する路線。

かくて「マルクス主義」は三分解したわけだが、本稿の行論から明らかなように、いずれの路線も、エンゲルスの行き詰まりを乗り越え、マルクスがつかみ取った理論を継承するものではなかった。

（つづく）

（注1）「『フランスにおける階級闘争』への序文」（1895年）

参考文献

大谷禎之介『図解 社会経済学』『マルクスのアソシエーション論』

大藪龍介・他『アソシエーション革命へ』

田畑稔『マルクスとアソシエーション』

国家・イデオロギー・階級闘争

長期連載――変革構想の研究　第12回　アソシエーション（2）

請戸 耕市

アソシエーションに関して〈権力はどうするのか〉という問いがある。それを念頭に論を進めたい。〈権力の力で資本主義を廃絶する〉。要約すればこれがロシア革命のコンセプト。たしかに生産手段の国有化で資本家は一掃した。しかし商品貨幣関係はなくせなかった。小商品生産者らに対する残酷な絶滅戦を強行したが無理だった。この無理がスターリン主義発生の一つの原因。結果は深刻だった。

ロシア革命とマルクス主義

マルクス主義の欠陥

ロシア革命はマルクス主義の基本路線通り。そこに問題があった。

マルクスの理論を、エンゲルスら後継者たちが整理解説したものがマルクス主義。その理解の中心は、〈搾取関係の把握から階級対立へ、階級闘争激化で権力奪取へ〉。

端的に言えば、搾取関係からの単線的把握。そこからする、矛盾の総体的把握の欠如、客体と主体の乖離、客体にも主体にも無媒介な主意主義的変革実践。

【レーニン】

マルクス主義を正統的に継承。搾取関係の単線的把握の上に、階級対立から国家を導出、国家の暴力性と革命の権力問題を強調した。

【グラムシ、アルチュセール、プーランザス】

敗北の教訓から問題を提起。相違を捨象すれば、暴力性・権力問題に対して、イデオロギー性を強調。マルクス主義の問題点の指摘としては重要だが、欠陥を超えるものはなかった。

私的所有―変遷原理

マルクスの把握を結論だけ示せば以下。

▼商品関係（交換）と資本関係（搾取）は二重。矛盾しながら転回している。

▼その大本に私的所有という編成原理が座っている。私的所有から社会システムが発生している。

▼私的所有の社会システムの矛盾は、〈商品関係と資本関係〉〈賃労働と資本〉〈私的生産としての社会的生産〉の総体。

▼資本の生産は、資本の自己否定として、転倒形態で社会的生産を形成している。

▼労働する諸個人は、抽象的だが自由な人格を起点に、意識的自覚的な主体として陶冶されていく。

▼理解のカギは私的所有。

私的所有

マルクスが批判する私的所有とは、生産手段の所有問題ではない。（生産手段の所有論的な規定は「ソ連＝社会主義」の正当化のためにねつ造されたドグマ）。私的所有とは、交換過程において、商品所持者同士が、商品・貨幣の私的所有者として相互承認する意志関係、そこから発展する法的関係。

社会システムは、根源的にはすべて労働から発生している。しかし労働の力は、疎外されて私的所有の力に転換している。私的所有は、労働に対立して他者化したもの。私的諸個人から疎外された社会的な力の発現点。だから、労働の他者化である私的所有によって社会の総体性をつかみ、その止揚を展望できる。

私的所有はシステムとして分化・展開する。（1）運動主体としての商品、（2）その反対の単なる私的労働、（3）抽象的に自由な人格、（4）労働を措定した資本、（5）法的抽象的な共同体としての国家、（6）転倒形態での社会的生産、（7）意識性社会性の転倒形態である社会法則。

自己矛盾的展開

資本関係が搾取を露呈しつつ、自由・平等な交換である商品関係に不断に転回して正当化する。私的所有は存立する矛盾。しかしまた、資本関係が搾取を露呈し商品関係と矛盾することは、私的所有の破れなのだ。

（イ）この矛盾が、搾取や貧困として現象し、労働する諸個人の自由な人格を否定、矛盾が意識化される。

（ロ）他方で、私的所有は、資本の生産は、資本の自己否定として社会的なものを露呈する。

こうして、資本の社会システムの自己矛盾的展開を通して、（イ）自由な人格が否定を通して陶冶され、（ロ）社会的生産が転倒形態で形成される。

『資本論』が詳論する工場法制定は、一面では資本の矛盾の弥縫（びほう）的な解決だが、転倒形態での社会的生産の形成をとらえて、労働者の側から、規制という形で社会的につかんだものでもある。

【アソシエイトした諸個人】

労働する諸個人が、現れ出た社会的なものを意識的自覚的につかむ運動が社会運動。転倒した形で潜在するアソシエーションを、意識的自覚的に顕在化させるのが社会革命。私的所有にかわる編成原理は、一切の他者化を排した〈アソシエイトした諸個人〉。

権力・暴力・イデオロギー

国家は自立的に発生しない。「階級対立の非和解性の産物」でもない。国家の原基は交換過程（『資本論』①第2章）にある。

かつて共同体生産では、i 労働の媒介、ii 人格の相互承認を共同体が担った。

共同体を解体した商品生産では、共同体にかわって私的所有が社会の編成原理となる。

私的所有の下では、i 労働の媒介が商品交換という回り道で行われ、ii 人格の相互承認は、交換過程において私的所有者としての相互承認として行われる。ii 人格の相互承認の意志関係が、法的抽象的な共同体を創出する。国家の原基である。

ブルジョア社会の公的総括

ブルジョア社会を〈私的〉に総括するのが市民社会。〈公的〉に総括するのが国家。ブルジョア社会という1つの本質の2つの極。〈ブルジョア社会／市民社会〉の区別に注意。

国家は〈社会的なもの〉の否定としての〈公的なもの〉。〈社会的／公的〉の区別に注意。

私的所有の編成原理は、一方で、市民社会から徹底的に社会的なものを排除し、他方で、排除した社会的なものを国家に吸収させ、公的なものとして発現させる。もって私的所有というブルジョア社会の秩序を護持する。

だから国家は「私的所有の制度」（『国法論批判』）、「ブルジョア社会の公的総括」（『経済学批判』序説）。

【公的な暴力】

私的なものは社会的なものに反発する。社会的なものを徹底的に排除する私的所有の秩序が公的な暴力の淵源。階級意志の有無ではなく、社会的なものを弾（はじ）く秩序が暴力なのだ。

【権力】

たしかに、国家は強大で抑圧的、しかもそれ自身が意志をもつようだ。しかし、国家の力は、実は、諸個人の力（意識性能動性社会性）が他者化して発現するもの（『ユダヤ人問題』）。

社会形成の主体は労働する諸個人だが、私的所有の下では、諸個人の力は私的でバラバラ。国家は、バラバラな私的な力を吸収し、公的な力に変換する。その変換装置が例えば天皇やヒットラー、安倍、トランプ。単に資本家の意を呈しているだけではない。他者化した諸個人の力をして、諸個人を抑圧する。その転倒の核心に私的所有がある。

【イデオロギー】

マルクスのイデオロギー論は物象化・物神性論。

私的所有の下では、生産における人と人の関係が、物象と物象の関係に転倒され、さらに、諸個人は諸物象の人格になる。この二重の隠蔽の下で「自由、平等、所有、そしてベンザム」（『資本論』）のイデオロギーが発生する。〈資本家も労働者も誰もが、自由で平等な私的所有者。誰もが私的利害を徹底に追求すればいい。それが予定調和的に公の利益になる〉という自由主義。

付け加えれば、公のイデオロギー。排除された社会的なものを公的なものとして吸収する。これも国家から生まれるのではない。私的所有による排除から発生する。

【公共機能】

社会的に必要な機能を吸収し公共の機能にする。支配と機能の両面がある。

【階級性】

階級国家と政治的国家の関係は、商品関係と資本関係の転回と同じで、不断に転回している。階級国家は、政治的国家の法的抽象的なあり方を廃棄しない。政治的国家が無媒介に階級的なのだ。

イデオロギー強調の難点

マルクスは、イデオロギーを、私的所有という発現点をつかんで批判した。それに対して、上述のイデオロギー強調は、イデオロギーを自立的なものと見ている。把握が搾取関係一元論で、私的所有という編成原理の把握が欠落しているからだ。さらに、イデオロギー支配の強調に自縛されている。物象化を自己完結的なものと見るから。私的所有の破れが重要なのだ。

〈階級闘争激化で権力奪取へ〉考

階級闘争

階級対立とは賃労働と資本の矛盾。賃労働は〈生きた労働〉、資本とは〈蓄積された労働〉。つまり労働の自己矛盾。だからこの矛盾を突き詰めてもその次元では止揚されない。階級闘争激化論の無理性である。

私的所有という編成原理の次元で、矛盾を総体として把握することだ。

私的所有とは、労働する諸個人の力（意識性能動性社会性）を全部、自己に対立的に他者化してしまったということ。労働する諸個人は単なる私的諸個人と化し、社会の編成に関する一切を他者任せにするしかない。他者とは商品、貨幣、資本、国家、法則その他。完成した転倒だから他者任せを簡単には廃絶できない。

しかし、変革の確かな展望も存在する。人格の自由とは抽象的だが意識的自覚的になりうる自由。そして、私的所有の下で、転倒形態だが社会的なものが形成されている。それを意識的自覚的につかみに行けるかどうか。それは「並外れた意識」（『要綱』）だ。

だから、社会的なものをめぐる攻防・消長の長い過程の中で、意識的自覚的な諸個人が、上からでもなく、法則に委ねるのでもなく、アソシエイトしていく。こうして私的所有にかわってアソシエイトした諸個人が社会の編成原理として成長し、他者任せを廃絶する。

権力問題

権力とは自己の他者化（アナキズムとの区別）。プロレタリア権力とプロレタリアを冠しても他者。〈権力を取る〉とは他者化すること。既成の権力はもちろんだが、それを壊しても同じ。

権力の力で社会を作りかえるという発想は自家撞着。他者化した力で他者化の原因を廃止できない。アソシエイトした諸個人にしかできない。

国家の解体は粉砕でも打倒でもない。アソシエイトした諸個人という、その力を他者化しない編成原理を産み出す社会運動にしかできない。その運動の結節環がコミューン。それは他者化としての権力とは原理的に違う。そのカギは拘束的委任制にある。

（つづく）

参考文献
アガンベン『例外状態』
有井行夫・編『現代認識とヘーゲル＝マルクス』
有井行夫『マルクスはいかに考えたか』
大藪龍介『近代国家の起源と構造』
境　毅『Alternative Systems Study Bulletin』第22巻6号
柴田高好『マルクス政治学原論』
パシュカーニス『法の一般理論とマルクス主義』

長期連載――変革構想の研究 第13回 アソシエーション（3）

プロレタリア独裁か、拘束的委任制か

市戸請耕

アソシエーションとの関連で、プロレタリアート独裁について考えたい。

まず、マルクス、レーニン他の言及を見てみよう。（傍線引用者）

【エンゲルス】

Ⓐ「革命的な臨時秩序の本質は、まさに権力の分立が臨時的に廃止されている点にある、立法権力機関が執行権力を、あるいは執行権力機関が立法権力を、一時的に自分の手に奪取する点にある」（1848）（注2）

【マルクス】

Ⓑ「すべての革命のあとに続く臨時的な国家秩序は、独裁を、しかも精力的な独裁を必要とする」「すべて未構成の秩序のもとでは、あれこれの原理ではなくて、もっぱらsalut public公安ということだけが基準になる」（1848）（注3）

【エンゲルス】

Ⓒ「革命は、住民の一部が他の部分にたいして、銃や銃剣や大砲を手段として…自分の意志を押しつける行為である。そして、勝利した党派が自己の闘争をむだに終わらせたくないならば、彼らは、その武器が反動家達に引き起こす恐怖によってこの支配を維持しなければならない」（1872）（注4）

【レーニン】

Ⓓ「独裁という科学的概念は、なにものにも制限されない、どんな法律によっても、絶対にどんな規則によっても束縛されない、直接暴力に依拠する権力以外のなにものも意味しない」（1906）（注5）

Ⓔ「独裁の欠くことのできない標識、独裁の必須の条件は、階級としての搾取者を暴力的に抑圧すること」（1918）（注6）

Ⓕ「ブルジョア国家の形態は多種多様であるが、その本質は一つである。これらの国家はみな、形態はどうあろうとも、結局のところ、かならずブルジョアジーの独裁なのである。資本主義から共産主義への移行は、もちろん、きわめて多種多様な政治形態をもたらさざるをえないが、しかしそのさい、本質は不可避的にただ一つ、プロレタリアートの独裁であろう」（1918）（注7）

【スターリン】

Ⓖ「レーニンはこう言っている、…『小規模生産は…資本主義とブルジョアジーとをたえず…大量にうみだしている…』『階級を絶滅することは、地主や資本家を駆逐することだけではない…、小商品生産者を絶滅することを意味する…』（注8）…だから、プロレタリアートの独裁…は、歴史上の一個の時代と見なければならない」（1924）（注9）…ほんの瞬間的な時期とみるべきではなく…

プロ独論の変遷

Ⓐ Ⓑ臨時性と全権掌握

マルクス・エンゲルスが、1848年3月ドイツ革命を評論して独裁に言及している。ただし、この独裁はブルジョア独裁。

特徴は、フランス革命史研究に踏まえ、独裁の臨時性、全権力の特定機関による掌握、さいの法律・規則に拘束されない」と規定した点。

Ⓔ必須条件は暴力的抑圧

干渉戦・内戦とカウツキーなどとの論争の渦中で示された実践としてのプロ独。ここでレーニンは、以前の超法律・超規範という規定の上に、プロ独の暴力的抑圧の契機を強調した。それは、拘束のない赤色テロリズムの発動であった。

Ⓕ独裁があらゆる国家の本質

Ⓔと同時期、レーニンは独裁論で踏み込みをおこなう。

マルクスもエンゲルスも、独裁を臨時的と限定していたが、レーニンは、ここで限定を取り払い、すべての国家に貫通する本質として独裁を一般化した。独裁の一般規定はレーニンに始まる。

Ⓖ小商品生産者を絶滅する時代

レーニン独裁概念を復唱しながら、それを物質化に努めたのがスターリン。

商品関係が厳然と支配する社会にあって、それを権力の力で絶滅していく政策の要がプロ独。そしてその期間は「時代」という長さで続くと言明。

レーニンとスターリン

マルクス

マルクスの（エンゲルスも）独裁は基本的プロ独はキー概念とはいえない。

マルクス主義の欠陥

独裁概念が大きな意味を持つのはレーニン以降、とりわけロシア革命以降。

レーニンのⒹ「法律にも規則にも束縛されない直接暴力に依拠する権力」は画期をなす。超法規・超規範の規定は、権力の本質を言い当てていると言えるが、思想問題も凝縮している（後述）。

とはいえ、Ⓓの時点は実践以前の理論上の論議だが、ⒺⒻⒼは実践の最中で打ち出されたものとして重みがある。実践の中で打ち出されたレーニン・スターリンの規定を中心にすえるべきだ。

さらに、スターリンだけを切り離して議論するのも恣意的で不当だ。マルクス主義の基本路線を忠実に実践し物質化し、プロ独の実際を体現したスターリンを外しては論じられない。

近代のダークサイド

シュミットとレーニン

権力の本質を、このような超規範、ないし規範自体を決める存在だ、と論じた者がいた。C・シュミット（注10）は、「例外状態」「主権独裁」などを論じ、法秩序の中立性や普遍性を装うリベラリズムの思想に対して、その仮面を引きはがし、その背後にある価値的な判断を引きずり出した。

行論との関係で敷衍すれば―秩序は反秩序があって規定される。そして秩序・反秩序の上に立って、そもそも何が秩序で反秩序なのかの価値基準を決めるのが主権者＝権力。反秩序の否定をもって社会を秩序づけるのが権力。この権力は具体的人格として現象するが、前回の議論に沿えば、他者化した権力である。

これはリベラリズムの法秩序思想の欺瞞性を突いた批判。しかし、他者化した権力を、労働する諸個人の意志として自覚的に取り戻すという方向で議論しているのではない。欺瞞の仮面を剥いで、あからさまに特定の権力者に諸個人の力を集中させることで、近代の欺瞞を露見させる、ということを主張した。だから、シュミットの主張はナチスの実践を支えるものともなった。

このように、近代の法秩序のダークサイドを右から暴いたのがシュミットであるとすれば、同じ趣旨を左の側から突き出したのがレーニンのプロ独論といえる。どちらも法秩序のダークサイドに権力の本質を見ている。同時にどちらも近代の限界を究極的に突き詰めたが、しかし、それを越える思想ではなかった。

プロ独国家とは、そういう意味で、プロレタリアートを冠しているが、近代国家の究極の姿であり、止揚すべき他者である。

拘束的委任制

プロ独のようには光は当たらなかったが、その対照をなすものとして、拘束的委任制という考え方がある。

1848年革命時の共産主義者同盟、チャーチスト運動、国際労働者協会、パリ・コミューンなどにおいて採用された拘束的委任制。諸個人（選挙者）が派遣委員を選出、その派遣委員が、選挙者に対する拘束的委任の受任者として、選挙者の指示に服する。コミューンの編成原則。

拘束的委任制では、選挙者の決定に対して派遣委員が背いたり、履行しなかったりすれば、解任される。そういう形で、各級のコミューンから中央まで、拘束的に委任された派遣委員によって下から厳しく統制される。同時に諸個人の自覚と責任が問われる。その下で、要求・規範・目標・政策などが決定され執行される。レーニンの言う超法規超規範とは真逆で、どんな議会制民主主義よりも、厳しく諸個人に拘束される権力ならざる権力、中央ならざる中央。こうして、他者化した権力を、労働する諸個人の意志として自覚的に取り戻し、国家に吸収されていた自らの力を、コミューンの下に再吸収していく。

近代国家の代表制

近代国家の編成原則は代表制。「国民主権」を謳いつつ、議員に代表委任（白紙委任）する。議員は選挙者の拘束を受けない。議員は選挙者を代意代行し、他者化した意志を発現する。拘束的委任制とは対照的。

レーニンの考えは、議会制は廃棄だが、代表制は保持。ソヴィエトで代表制が定着し、代意と代行が蔓延した。（つづく）

（注2）Ⓐ「7月4日の協定議会の会議」『全集』⑤

（注3）Ⓑ「危機と反革命」『全集』⑤

（注4）Ⓒ「権威について」『全集』⑱

（注5）Ⓓ『カデットの勝利と労働者党の任務』『全集』⑩

（注6）Ⓔ『背教者カウツキー』『全集』㉘

（注7）Ⓕレーニン『国家と革命』第2版・第2章第3節

（注8）「共産主義内の左翼空論主義」『全集』㉛

（注9）Ⓖ「レーニン主義の基礎について」『スターリン全集』⑥

（注10）1888～1985年。ドイツの政治学者。ナチス党員でもあった。

【参考文献】
大藪龍介『国家と民主主義』、「代表制と派遣制」（『マルクス・カテゴリー事典』所収）
仲正昌樹『カール・シュミット入門講義』

長期連載――変革構想の研究 最終回 アソシエーション（4）

21世紀のオルタナティブとは何か

請戸 耕市

アソシエーションはどこに？

アソシエーション（協同組織、協同組合的社会、新しい社会）について、3回にわたって論及してきた。まとめとして5点述べたい。

第1点。〈社会的なもの〉とか、〈潜在しているものを、意識的に顕在化させるのがアソシエーションだ〉と述べてきたが、そういう〈社会的なもの〉とか、〈アソシエーションの萌芽〉というものが一体どこにあるのか、という問題である。

身近な例を二つほど挙げたい（当該の皆さんにたいする僭越をお許し願う）。

関生の運動

一つは、激しい弾圧の最中にある「連帯ユニオン関生支部（以下、関生）」の運動だろう。

関生の運動を、勝手ながら端的に言えば――労働者のヘゲモニーで企業の枠を超え、産業政策をもって、中小事業者を協同組合的に組織し、大資本に立ち向かって規制を加えることで、労働者の雇用と権利を守る――という運動といえるだろう。

これは、日経連会長（1981年）をして「資本主義の根幹にかかわる」と言わしめた通り、大資本の支配を内側から蚕食する――カイコのように侵していく――アソシエーション運動に他ならない。だから激しい攻撃にさらされている。

介護・福祉の取組み

もう一つ例を挙げれば「介護・福祉総がかり行動」だろう。

高齢者の介護という問題が、大げさではなく、人類が未だ経験したことのない、重大テーマになっている。ところが、国家・資本はこれを解決できない。しかし、現実の方はどんどん深刻になっていく。

そこで、介護労働者と事業者と利用者が、立場や団体にとらわれずに大同団結して、改悪を重ねている介護保険制度に立ち向かって、生きるための、ギリギリの取り組みを開始している。

これも紛れもなく〈アソシエーションの萌芽〉だといえる。

二つの例をあげたが、このように見て行くと、実は、いたるところにアソシエーション運動の可能性が見出せるのではないか。沖縄の島ぐるみのたたかいも、そういう観点でとらえ返すことができるではないか。そう考えている。

今年元旦、大阪府警前でおこなわれた関西地区生コン支部弾圧への抗議闘争

矛盾を拡大する陣地戦

2点目は、資本主義社会の原理的な仕組みについて若干。

労働とその転倒

一つは、社会をつくっているのは人間の労働だ、ということだ。これはゆるぎない事実。

しかしまた、その人間の労働の力が、資本の力として、つまり、他者の力になってしまって、転倒して発現している。これが資本主義、近代ブルジョア社会だ。

そして、資本や国家が、人間自身の力の発現でありながら、あたかも、自身の手に負えない強大なものであるかのように現れてしまっている。

ここに、支配という問題の難しさがある。しかしまた、人間自身の力で必ず自己を解放できる、という根拠もここにある。

資本の矛盾

今一つは、資本の矛盾についてだ。

資本は、言うまでもなく、徹底的に私的な利害を追求するものだ。しかし、そうでありながら、この私的な利害追求の資本によって社会的な生産が行われている。資本という私的なものによって社会のすべてがつくられている、という矛盾した仕組みになっている。つまり、資本の運動は、〈私的でありながら、社会的である〉という矛盾を抱えている。

この矛盾が、大きなカギをなす。すなわち、〈私的で社会的〉という資本の矛盾を、徹底的に意識的に拡大していく、そういう陣地戦がアソシエーション運動だ、ということができる。そして、矛盾を拡大する陣地戦＝社会革命を総括軸に据えてこそ、結節環としての政治革命＝起動戦も現実的なものとなる。

歴史の大転換期

3点目。時代は、大きな転換期にさしかかっている、という認識だ。

社会を飲み込む時代

振り返れば、19世紀から20世紀初頭の時期も、歴史の大きな転換期だった。工場法をめぐる労働運動やパリ・コミューン、ロシア革命の時代だ。

端的にどういう時代だったかというと――私的利害を追求する資本の運動が、社会を、もの凄い勢いで飲み込んで行く時代であった。

社会を破壊する時代

翻って、21世紀の現代は、新自由主義・グローバリズム・金融化の時代だという。それはどういうことか。一言で言ってしまえば、社会にたいして、資本がもはや全く無関心に、その私的利害だけをむき出にして暴走する時代だ。

それは、〈私的な資本が、社会的な生産を行う〉のが資本主義だったが、そういう矛盾したやり方を、これ以上、続けていけないという意味だ。

だから、新自由主義・グローバリズム・金融化は、資本も国家も、私的利害をむき出しにして、社会にたいして破壊しかもたらさない。いま世界中で起こっていることは、まさに社会の破壊ということだ。

歴史の弁証法

つまり、19世紀から20世紀初頭が〈資本・国家が社会を飲み込む時代〉であったが、21世紀は〈資本・国家が社会を破壊する時代〉に局面が転回している。社会の破壊ということは、近代ブルジョア社会――すなわち、人間の労働の力が、資本の力として発現される社会――の、その存立にかかわる歴史的な局面を迎えている、ということだ。

この歴史の大きな転回を貫く動因は、上で見た〈私的で社会的〉という資本の矛盾である。矛盾の故に近代ブルジョア社会は存立してきた。しかしまた矛盾の故に、近代ブルジョア社会が、矛盾の止揚に向かわざるを得ない。そういう歴史の弁証法の貫徹である。

アソシエーションは、矛盾の中からその止揚として産出されていく。

ポピュリズムとオルタナティブ

4点目。オルタナティブ（代案）が焦眉の課題になっている。

焦眉の課題

社会の破壊にたいする人びとの怒りが、差し当たり、ポピュリズムや差別・分断という形で噴出している。それは深刻な問題である。しかし、そこを一皮めくれば、切実な社会的な要求、つまり、雇用であり、生活、教育、医療、介護、環境や社会インフラ、あるいはアイデンティティ

といった問題について、具体的にどうするのか、という切実な叫びに他ならない。

そのように捉え返すことができる。ではどうして、ポピュリズムや差別・分断なのか？

それは、新自由主義・グローバリズム・金融化にたいして、オルタナティブ（代案）が見えていないから。まさにこの点に焦眉の課題がある。

労働運動と社会運動

しかしまた、新自由主義・グローバリズム・金融化こそ、オルタナティブを現実化させる。すなわち、資本主義社会がその矛盾の故に、ついに社会を破壊するグローバリズムにまで至り、その矛盾の中からアソシエーションが顕在化していく。

だからこそ、アソシエーションが、運動の具体的な指針になってくる。社会をつくるのは、国家や資本ではなく、労働する諸個人一人ひとりの自覚と行動なのだ。

実際、アメリカの運動に注目する必要がある。グローバリズムによってもっとも激しく社会の破壊が進行しているアメリカで、労働運動と社会運動が地域社会の再生において連携し、グローバリズムとポピュリズムの双方への対抗運動として拡大している。それが政治をも大きく動かしている。

まさに21世紀こそ、アソシエーションの時代なのだ。

革命理論の刷新

5点目。問題は、こういう時代の大転換にたいして、われわれの理論や思想が大きく立ち遅れている、ということである。

革共同は、反スターリン主義を掲げてきた。しかし、本当にスターリン主義と対決し、その根本原因を総括してきたのだろうか？理論においても、体質においても、スターリン主義そのものになってなかっただろうか？

あるいは、マルクス主義を掲げてきたが、それは、マルクスのつかんだ理論を、本当に引き継いできたものだったのだろうか？

反スターリン主義を掲げているから、自分たちは、スターリン主義とは無縁だと思い込んで、真剣な格闘をずっと怠ってきたのではないだろうか？

グローバリゼーションの時代、社会の破壊の時代だからこそ、アソシエーションの時代であり、だからこそ、ヘーゲルやマルクスが問題にしたような、大きな世界観、思想の大きな枠組みといった問題が、改めて、問われていると思う。

だからこそ、もう一度、マルクスを読み直し、単に戦略・戦術の選択ではなく、ましてや解釈の問題ではなく、近代全体を総括するような、世界観や思想の枠組みの次元で、革命理論を考え直すチャンスなのではないか、そういう問題提起をしている次第である。

それが、幾多の敗北の歴史を乗り越える途であり、そして、倒れた同志たち、仲間の皆さん、悪戦苦闘する世界の人びとに報いる途だと確信する。

（おわり）

【おわびと訂正】

本紙前号1面の「関生弾圧　争議に刑事弾圧は違憲」の記事中、熊沢誠さんの肩書きで「研究会『職場の人権』代表」とあるのは誤りで、正しくは「研究会『職場と人権』顧問」です。おわびして訂正します。